楽しみ、守る人がいる

地域の財産として登山道を守る人がいる。
歩きやすく、安全に登山者が山を登れるのは、その道を整備する人がいるから。
自然に親しみ、活躍する３団体の取り組みを聞く―

宮島弥山を守る会

― 原始林を守るために ―

宮島弥山を守る会　会長
よしだ・しょうゆう
吉田　正裕さん

宮島の周囲は約30㎞、面積は30ヘクタールの島で、瀬戸内海国立公園の中にあり、島全体が特別史跡、特別名勝、原始林に覆われた世界的にも珍しい島。その自然環境を守るために活動をしているのが宮島弥山を守る会だ。

「平成3年の台風で、宮島島内の建築物や原始林がずいぶん損なわれました。この会を結成したのは、宮島の原始林を保全できないのではという危機感からです」と会長の吉田正裕さんは話す。

会では、毎月21日に弥山清掃登山や弥山、宮島の歴史などを学ぶ勉強会などの活動を続けている。清掃登山はホームページなどの申し込みや当日大聖院に集合した参加者で行われる。

「本来宮島は、神の島として立ち入ることもできませんでしたが、近年では多くの観光客の皆さんが来られるようになりました。訪れた人に宮島の四季折々の姿や自然を五感で楽しんでほしいです。登山道は時期によっては落ち葉が積り、滑りやすく危険な箇所もあります。そういったところを取り除き、安全に歩くための助けになればと思います」と吉田さんは語る。

参加者は島への愛情を持ち活動をしている。その一人一人の思いが安全な登山道になっている。

登山者が安全に歩けるよう滑りやすい落ち葉を除く。活動への参加はホームページなどで随時受け付けている。

大峰1050（おおみねいちまるごーまる）

― 玖島の良さを伝えるために ―

大峰１０５０は、今から13年前の平成14年に発足。会の発足当時、大峰山の登山道は分かりにくく、道に迷う登山者もいた。また、現在の登山口付近は廃校になった校舎の跡や遊具が残り、草木が茂っている状態だった。

その状況を改善しようとした有志で発足。登山道や駐車場の整備、トイレや案内版、大峰まつりに使うステージの制作を行ってきた。

名前の「１０５０」は大峰山の標高が１０５０ｍあることから。現在では１０００ｍを超えるアクセスのしやすい山として、市内外から登山者が訪れる。

「会では、清掃登山や大峰まつりの準備などのほか、年末には会員でご来光登山を楽しんでいます」と会長の矢口信二さん。

この地域は昔からの文化財が多い地域としても有名だ。重要無形文化財「上川上の六地蔵像」や史跡の「八田家」がある。

また、地域の中心を流れる玖島川は、大竹市へ流れる小瀬川へと続き、昔から生活の大切な水源となってきた。

「玖島の良さを知ってもらい、この地域を盛り上げたい」そういった思いも会の立ち上げの動機になったとのこと。地域ぐるみで活動を続けてきたことの意義は大きい。

「大峰山は樹木の香りに包まれての森林浴を楽しみながら登山ができます。また、登山口までは、この地域ならではの里山が続き、その風景も魅力の一つです。訪れる人が、玖島にいい思い出を残して帰ることができればと思います」と13年前、会の発足時に植えられた満開の桜の木の下で、矢口さんは話してくれた。

写真＿1　登山口に整備した駐車場。写真＿2　駐車場内にあるトイレ。くみ取り式のため、地域の人が清掃を行っている。

大峰１０５０　会長
やぐち・しんじ
矢口　信二さん

おおの自然を愛する会

― 地域の自然で遊び、学ぶ ―

おおの自然を愛する会　会長
たなか・ゆうじ
田中　雄司さん

経小屋山（きょうごやざん）に船倉山（ふなくらやま）、大野権現山（おおのごんげんざん）など名峰を抱える大野。「おおの自然を愛する会」は多くの登山者が訪れる山道の整備をしている。

発足のきっかけは、有志の４人が登山者のために荒れた道を整備したことだった。気持ちよく安全に登山ができるようにと下草の刈り上げや案内板の設置、危険箇所へロープを張る取り組みをしている。

また、活動は整備だけに留まらず、新規の登山ルートの開拓や登山地図の作成、植物の観察会や親子のフィールド体験などのイベントまで手掛ける。

「普段自然に触れ合う機会の少ない人にも自然を楽しんでほしいです」と田中さんは話す。

「こういった活動を続けるのは子どもから大人まで自然を楽しむ姿を見ることができるから。会には植物や鉱物、動物、鳥類、アウトドア遊びなどさまざまな分野に精通した人がいます。そして、みんな大野の自然の良さを分かっています。だから一人でも多くの人に伝えたくなるんです」と笑顔で話してくれた。

写真＿1　おおの自然を愛する会の作成した案内板。登山道にも設置している。写真＿2　登山道の草刈りを行う会員。

写真＿1　13年前に植樹された桜。毎年山開きの時期には満開の花を咲かせる。写真＿2　大峰まつり前日の準備。ステージに畳を張ったり、テントを設営したりと準備に余念がない。大峰まつりの開催は会の発足１年後から。今年で12回目を迎える。

一つあれば、次々に捨てられる―

壊れたテレビ、飲み終わった空き缶。一つごみが捨てられている場所には人はごみを捨てやすくなる。

平成24年度、全国の不法投棄量は4.4万トンにものぼる。適切な処理がされない廃棄物は、景観を損ねるだけでなく、生態系にも影響を及ぼす。問題は山への大型ごみだけでなく、道端へのタバコの吸い殻や海辺での釣り具などの投棄もある。

遊びの達人は、守ることも達人。山に海へと出かけるときにはもちろん、普段の生活から身近な環境への気配りが、将来の廿日市の環境を作っていく。

特集　今、自然を思う。―終わり―